

命を弄ぶ男ふたり（一幕）

岸田國士

青空文庫

人物

眼鏡をかけた男
繃帯をした男

鉄道線路の土手——その下が、材木の置場らしい僅かの空地、黒く湿った土の、ところどころに、踏み躪られた雑草。遠くに、シグナルの赤い灯。

どこかに、月が出てゐるのだらう。

眼鏡をかけた男——二十四五ぐらゐに見える——が、ぼつねんと、材木に腰をかけてゐる。考へ込む。

溜息をつく、涙をかむ。眼鏡を外して拭く。髪の毛をむしる。腕組みをする。服の皺を伸ばす。舌を出す。

繃帯をした男が現はれる。つまり、顔中繃帯で包んでゐるわけであるが、両方の眼と、鼻の孔と、口の全部、それだけが切り抜いてある。

眼鏡をかけた男の前を行つたり来たりする。そこに人があるのを知らないやう

にも思はれる。土手の上にあがるが、すぐ降りて来る。

眼鏡 君、君、踏切はもつと先ですよ。

繃帯 （別段驚いた様子もなく）さうですか。踏切はもつと先ですか。（独言のやうに）

踏切はもつと先……と（眼鏡をかけた男と並んで腰をかける）

眼鏡 どこかへいらつしやるんですか。

繃帯 行かうと思ふんですがね。君も、どつかへいらつしやるんですか。

眼鏡 行かうか、どうしようかと思つてゐるんです。

繃帯 なるほど。行くのもいゝが、どんなのですかね。うまく、一と思ひに、行けま
すかね。

眼鏡 さあ、行つて見ないことにや、わかりませんな。

（長い沈黙）

繃帯 君は、どう思ひます、此の辺ぢや、やつぱり、此処でせうな。

眼鏡 さうですな、まあ、此処あたりでせうな。

繃帯 迷ふことはないんだが、さて、迷ひますな。

眼鏡 いろいろ考へるからですな。どうにもしようがないといふ場合に、これですからな。

繃帯 僕は、かう見えて、センチメンタルなことは嫌ひな男ですがね。書置一つしてないんです。それといふのが、理由ははつきりしてゐるし、これがまた、至極、散文的でしてね。

眼鏡 いや、その点では、僕なども同様ですよ。それや、人によつては、別の道を選ぶかも知れませんが、結局、癒^{なほ}らない疵は癒らないんですからね。

繃帯 君の云はれることは、どうもよくわかりませんが、さういふ意味でなく、僕は、死といふことによつて、或る問題を解決しようとしてゐるのではなく、既に死人に等しい自分のからだを、自分で始末しようとしてゐるだけなのです。だから、何も、今更、英雄的な覚悟や、非現実的な空想で、此の一瞬間を、悲壮な物語りに作り上げる必要はないのです。

眼鏡 僕も、それを云ふのです。どうせ自分は意気地なしだ。人生の敗残者だ。運命の

犠牲者だ。さう思へばこそ……。

繃帯 いや、いや、君はわかつてゐないんです。それや、その筈だ。君は、かう云つちやなんだが、一時の出来心でせう。恋人に捨てられたとか、会社の金を遣ひ込んだとか、誤つて人を殺したとか……。

眼鏡 はゝゝゝ。さう見えますかね。いや、もう何んにも云ひますまい。人の苦しみを、一人の男の苦しみを、さう簡単に片づけられちや、たまらない。

繃帯 ちがひますか。まあ、それならそれでいゝ。お互に、かうして、偶然、同じ死に場所を選んで、そこへ同時刻に落ち合つた、ただそれだけの事実には、さうこだはることはない。どうぞ、僕にはおかまひなく……。

眼鏡 いや、君の方こそ、どうぞ……。然し、僕もまだ血の通つてゐる人間です。眼の前で、勝手なことをされては迷惑です。踏切りも、そんなに遠くはない。どうです。人を呼びませうか。

繃帯 人を呼ぶ……。呼んでどうするんです。（間）邪魔はしつこなしにしようぢやありませんか。

眼鏡 かう見えて、僕は、人一倍、物事を考へる方なんです。軽率だとか、向ふ見ずだ

とか云はれることが、一番不愉快なんです。

繃帯 あゝ、それだからですね、ぢや、一つ、その理由といふやつを、伺ふことにしま
せうか。

眼鏡 それはお話してもよござんすがね。それより、君は一体、どういふんです。さう
深い事情も、おありにならないやうだが……。

繃帯 さう見えますか。それならそれでかまひませんがね。はゝゝゝ、此の繃帯がわ
かりませんか。

眼鏡 やけど 火傷でもなすつたんですか。

繃帯 さうあつさり云つてのけられたんぢやね……。まあ、よしませう。

眼鏡 火傷には、実によく効く薬があるんですがね。

繃帯 火傷なら、火傷として置きませう。それが癒つたら、どうなるんです。

眼鏡 いゝぢやありませんか。

繃帯 顔中にひツつりが出来ても……。二た眼とは見られない顔になつても……。

眼鏡 御商売は。

繃帯 僕は商売人ぢやないんです。応用化学の研究をしてゐる、つまり、学者なんです。

人造ダイヤモンドの発明に没頭してゐたんです。もう九分九厘まで成功しかけてゐたんです。処が、一寸したことから、薬品が爆発しましてね。

眼鏡　それなら、猶更ぢやありませんか。折角九分九厘まで出来上つてゐる、その研究の方を続けておやりになれば、それが出来ないことはないんでせう。顔がなんです。男振りがなんです。元来、君のやうな仕事をやつてをられる方は、却つて……。

繃帯　まあ、お待ちなさい。僕は、これで、まだ独り者なんです。

眼鏡　丁度いゝぢやありませんか。

繃帯　許嫁があるんです。

眼鏡　その人はどう云ふんです。

繃帯　かまはないと云ふんです。

眼鏡　そんなら、何も云ふことはないぢやありませんか。なあんだ、それぢや、君、第一……。

繃帯　それと云ふのが、その女は、僕を愛してゐるんです。

眼鏡　さうでせうとも。

繃帯　僕は、或る時、思ひきつて、繃帯を取つて、此の顔を見せてやつたんです。

眼鏡　それでもいゝつて云ふんでせう。

繃帯　（うなづいて）さうして、僕の胸に顔を押しあてて、泣くんです。悲しくはない

つて云ひながら泣くんです。

眼鏡　わかりますね、その気持は。

繃帯　僕にはわからない。

（やや長い沈黙）

眼鏡　わかるぢやありませんか。

繃帯　わかるとすれば、彼女が嘘をついてゐるといふことです。

（やや長い沈黙）

僕は、決心しました。決心したといふよりも諦めあきらました。さうです、諦めたんです。

眼鏡　さう、諦めたんですなあ。

繃帯　ね、さうでせう。頗る簡単です。（間）僕は、かう見えて、センチメンタルなところ、嫌ひな男なんです。

眼鏡　僕も、かう見えて、人一倍、物事を考へるたちなんです。僕は俳優です、まあ名前を云へば、御承知かも知れませんが、それはいひますまい、僕は俳優なんです。新劇の方では、相当認められてゐる俳優なんです。八歳の時に両親を失くして、伯父にあたる——これも名前を云へば御承知かも知れませんが、まあ、云はずに置ませう——その伯父の家に引取られたのですが、そこに、一人、娘がありましてね。

繃帯　もうその先は、伺はなくてもわかるやうな気がします、それぢや、ただの恋愛事件ですね。

眼鏡　ただのとは、どういふんです。ぢや、君のは何んです、そんな、つまらない義理立てぐらゐで、人が参ると思ふんですか。

繃帯　参るとか参らんとかは問題ぢやないでせう。それで、結局、どうなつたんです。

眼鏡　その先がわかつてゐるなら、云ふ必要はないでせう。

繃帯　まあ、さう怒り給ふな。

眼鏡　話を始めるか始めないうちに、それで結局どうなつたなんて聞く法がありますか。

張合ひもなにもあつたもんぢやない。

繃帯 さうまた、張合ふこともないわけですね、話が話なんだから。つまり、その娘さんと添ひ遂げられなくなつた。それで悲観の末、と、かういふところらしいな。

眼鏡 何が、ところらしいんです。違ふも違ふも大違ひだ。はゝゝ、人のことつていふものはわからんもんだなあ。その娘は、たうとう病気で死んだんです。（涙ぐんで）可哀さうなことをしました。その病氣も、僕が種をつくつたやうなものなんです。僕が、或る女優と、どうのかうのつていふ噂が立つた。そんなことは絶対にないんです。それを苦にして、つまり、ほんとだと思つて、日夜煩悶したんです。一人で、小さな胸を痛めたんです。その女優が、一座の座頭と、名を云へば御承知でせう、然し、それは云ひますまい、その座頭と結婚した、そのことが新聞に出るまで、その女は僕の云ふことを信用しなかつたのです。然し、疑ひが晴れた時は、もう遅かつた。彼の女は、病院のベツトの上に、瘠せ衰へたからだを横たえてゐたのです。（涙を拭き、鼻を嚙り）僕は馬鹿でした。意気地なしでした。今から考へると、なぜ、その時、すぐに、役者なんか止して、これ御覧と云つてやらなかつたか、それを思ふと、なまじ、芸術がどうのかうのと夢中になつて、下らない台詞なんかばかり、覚えようとしてゐた、あの時の自分が、

情けなくもあり、憎らしくもあり……僕は、遅まきながら、死んだ女の心持ちを、自分の心の中に活かさう、さうして、その女の後を追はうと決心したのです。

繃帯　　そいつは、つまらない考へだな。君が死んだら、どうなるんです。その娘さんのそばに、行けるとでも思つてゐるんですか。まさか、さういふわけぢやないでせう。なるほど、君の悲しみは、十分察しられる。然し、決して、永久に忘れることの出来ない悲しみぢやない。今は、それや、さうは考へられないでせう。そこがまた、君の美しい処なんだ。処で、君はいくつです。

眼鏡　　いくつに見えます。（間）

繃帯　　いくつでもいい。君はまだ若い。人生の花は、これからぢやありませんか。

眼鏡　　君はいくつです。

繃帯　　僕ですか。あてて御覧なさい、と云つたら、君は困るだらう。三十五ですよ。だが、僕の場合、年は問題ぢやない。

（やや長い沈黙）

眼鏡
繃帯

誰か来たやうですよ。見つかると厄介だ。（起ち上る）
線路巡視ですね。どれ、隠れるかな。

（兩人、姿をかくす。

土手の上を、人が通る。安全燈の火影が、さつと、舞台をかすめる。
汽笛。

汽車の音近づく）

眼鏡

（姿を現はし）もう、大丈夫ですよ。

繃帯

（続いて現はれ）^{くだ}下りですね。

眼鏡

神戸行の急行です。

繃帯

（腰を卸し）君こそ、思ひ止まるんですね。早まつたことはしないがいゝ。

（汽車が土手の上を通る。兩人、それを見送る）

眼鏡　込んでゐるやうです。

繃帯　込んでましたか。夜汽車は陰気だなあ。（間）

眼鏡　あなたこそ、立派な仕事がおありなんだから、それだけで、生きてゐる甲斐がありさうなもんですがなあ。

繃帯　生存の意義なんかどうでもいい。仕事は仕事、人生は人生です。君なんか、まだこれから、どんな仕事でも出来る。どんな恋でもできる。殊に、芸術家と云へば、仕事そのものが恋人ぢやないんですか。まあ、さう云つたやうなもんぢやないんですか。僕らにや、よくは飲み込めないが、かう、なんと云ふか、一種のヴォルルストと云ふかな、さういふもんがあるんぢやないんですか。からだのすくむやうな、ぞくぞくするやうな、融^とろけ込むやうな、さういふ状態に、何時でもなれるんぢやないんですか。

眼鏡　そんなことなら、あなたの方のお仕事でも、やつぱり、恋人に対するやうな心持ちになれるでせう。食ふことや寝ることを忘れてまで、仕事に熱中するなんていふこと……世間のことや、家庭のことを全く棄てて顧みないつていふことや、よくそんな話を聞くぢやありませんか。

繃帯　そりや違ひますよ。それはなるほど、学者の一面には、さういふところもある。

もう一面を見ないとわからない。つまり、人間の問題ですよ。理窟ぢやない。さうでせう、君と同じ境遇にある、もう一人の青年に聞いて御覧なさい。その青年は、君と同じ悲しみ、君と同じ悩みを、君のやうな方法で解決するかどうかかわからない。いや、寧ろ、さうしないのが普通でせう。しない方が正しいんだ。

眼鏡　正しいとは限りません。

繃帯　僕は飽くまで反対するな。（間）どうです、警察へ引渡しませうか。

眼鏡　警察へ……。さうして、どうするんです。（間）お互に、邪魔をしつこなしにしようぢやありませんか。僕こそ、あなたの不心得を諭してあげたいくらゐなんだ。

繃帯　諭す諭さないは別として、君こそ、家へ帰つたらどうです。悪いことは云ひませんよ。年長者の言葉を信用し給へ。

（汽笛、汽車の音）

眼鏡　（起ち上り）もう、何んにも云はないで下さい（土手の上に駆け上らうとする）
繃帯　（その袖をとらへ）よし給へ、君。それや、なんにもならんよ。

眼鏡 （振り放さうと藻掻きながら）放して下さい。僕のからだは僕のもんです。勝手

にさして下さい。

繃帯 それや、君のものさ、君のからだは。だから、つまらんことは止せと云ふんだ。

僕は、かう見えて、センチメンタルなことは嫌ひな男だ。死なしていゝものなら死なせるさ。
（突然声を荒らげて）馬鹿！ しつかりしろ！ （引摺りおろす）

眼鏡 （此の語勢に気を抜かれて）それぢや、あなたは、どうなさるんです。

繃帯 （此のひまに、相手を突き退け）僕は、かうする（土手の上に走り上る）

（此の刹那、汽車が通る。繃帯をした男の姿が消える）

眼鏡 あッ、やつたな。（間）たうとう、やりやがつた。畜生。

（さう云つてゐると、土手の上から、繃帯をした男が、のつそり降りて来る）

眼鏡 なあんだ、やらなかつたのか。

繃帯 やつたさ、やつたけれど、早すぎたんだ。正確に云へば、勢をつけ過ぎたんだ。

線路の向うへ飛び込んだんだ。しくじった。此の次だ（息をはづませてゐる）

眼鏡 だから、僕に先へやらせればいゝのに。

繃帯 さうはいかんさ。君に先へやらせちや、僕の顔が立たん。君の自殺には、僕は反対なんだ。見て見ないふりは出来ない。僕は、自分のことさへどうでもよけりや、君を家へ送り届けるなり、警察へ引渡すなりする処だ。然し、それができない。君が僕の言ふことを聞かない以上、君のやりたいことは、僕のゐない処でやり給へ。場所も此処と限つたわけぢやないんだらうから。

眼鏡 此処を先へ見つけたのは僕なんだ。

繃帯 あと先の話をしてるんぢやない。僕が生きて居る間、君を殺すわけには行かないから、さう思ひ給へ。

眼鏡 ぢや、僕を生かすために、あなたも生きることが考へたらどうです。それなら、話はわかる。

繃帯 さうか、君は、ほんとに死ぬ気はないんだな。さうだらう。それでわかつた。それならそれで、こんな処に、何時までもゐるのはよし給へ。もう、君、遅いぜ。今のが

十時の浜松行だ。

眼鏡　死ぬ気がないのは、あなたのことでせう。鉄道自殺のやり損ひなんていふのは、あんまり流行らないからな。

（この時、また汽笛が響く、と、やがて、列車の近づく音）

繃帯　よし、そんなら、見てろ（土手を登りかける）

眼鏡　今度は、僕だ（繃帯をした男を引摺りおろす）
繃帯　なにするんだ。

眼鏡　（この間に、素早く土手の上に駆け上る。汽車が通る。姿が消える）

繃帯　たうとう、やりやがった。ほんとに、やりやがった。畜生。こいつは、やつぱり、後ぢや、工合が悪い。

（かう呟く、が不図、土手の上を見ると、眼鏡をかけた男が、眼をこすりながら、とぼとぼと降りて来る）

繃帯 おや、こいつも擦れ違ひか。

眼鏡 駄目だ、貨物列車だ。

繃帯 貨物……？

眼鏡 あゝ、痛え（眼をこする）煤がはひりやがつた。こいつはいかん。とても痛い。

あいたた た……（間）

すみませんが、ちよつと、見て下さい。

繃帯 （見ながら）見るのはいゝが、此の明りぢや、君……。どら、もつと、上を向き

給へ。さう瞼に力を入れちや駄目だよ。

眼鏡 （瞼を両手で引きあげるやうにして）ありましたか、右の方ですよ。

繃帯 見えるもんか。これぢや。

（汽笛、汽車の音）

さ、来た、一人でゆつくり取り給へ（土手の上にあがらうとする）

眼鏡　痛い、痛い（繃帯をした男に縋りつき）後生だから、こいつを取つてからにして下さい。

繃帯　だつて、君……（もう一度、眼の中をのぞき込みながら）見えないものをとれたつて、それや無理だらう。

（汽車の音近づく）

痛いついでに、それぢや、一と思ひにやつて来たまへ、丁度いゝや。

眼鏡　そんな無茶なことを云はないで、どうかして下さい。これぢやどうすることもできやしない。

（汽車が土手の上を通り過ぎる。弁当の空が二人の傍に飛んで来る）

繃帯　（それを拾ひあげて）綺麗に食つてあらあ。

眼鏡　あいたた、あいたた……。さ、早く……。

繃帯 (弁当の空を棄て) どら、厄介な男だなあ、ハンケチかなんか出し給へ。

眼鏡 ポケツトにはいつてるやつを出して下さい。

繃帯 (ポケツトからハンケチを引き摺り出す) これでいゝの(そのはづみに、写真のやうなものが落ちる) おや、何か出たぜ(あたりを探す。一枚の写真を拾ひあげる) 写真だな。どれ……(明りにすかしながら) なるほど、これか。桃割れだね。や、これや素敵だ、どうだい。この笑ひ方は……。

眼鏡 さ、そんなことを後にして……。

繃帯 まあ、待ち給へ、これが第一ぢやないか。しかし、いゝ眼だなあ。これだけの眼は、君、一寸ないよ。

眼鏡 さうでせうか。(間) その眼が、もう永久に眠つてゐるんです。

繃帯 この眼がね、惜しいことをしたもんだなあ。此の口元だつて、大したもんだよ。此の年にしちや、珍しく蠱惑的だね。

眼鏡 その口が、堪忍して頂戴と云つたんです(泣声になる)それが最後でした。

繃帯 この口がね。

眼鏡 えゝ、さう云つたんです。

繃帯　それが、此の手を見たまへ。何んといふ、あどけなさだ。お手玉を握るためにできてゐる手だ。

眼鏡　いゝえ、それが、僕の手を握つたんです（声をあげて泣く）か、か、堪忍、堪忍、して頂戴、かう云ひながら、両、両手で、僕の手を、に、握り締めるんです。もう、もう、力が、力が、な、ないんです（泣き崩れる）

繃帯　この手でね（かう云つたかと思ふと、手に持ったハンケチで、自分の眼をおさへ）畜生、涙みたいなものが出て来やがる。（間）

眼鏡　僕は、かう見えて、人一倍、物事を考へるたちなんです。この決心をするには、それだけの理由があるんです。

繃帯　これぢや、なるほど、無理もない。君に取つちや、生きてゐるといふことは無意味だ。そこへ行くと、僕なんかは、なんと云つても、まだ、問題はこれからなんだ。つまり、僕は、自分の立場を悲観的に解釈してゐる。そこなんです、事の起りは。僕が、許嫁の心持を忖度するにしても、考へやうによつては、もつと、積極的に、有利に、素直に、考へて見ることも出来るわけなんです。自分の存在が、相手の幸福を妨げるといふ考へ、これや、もう、理窟ぢやない。自分がさう思つても、相手はさう思つてゐない

かも知れない。現に、この手紙です（ポケットから一通の手紙を取り出し）まあ、読んで御覧なさい。

眼鏡

（それを受け取る。開いて読もうとするが、よく見えない）

繃帯

見えませんか。（手紙を見ずに）かう書いてあるんです。「お手紙拝見いたしま

した。あなたは誤解をしていらつしやるんです。そりや、あのときは、ただ何となく涙が出ました。泣くといふことが、それほど単純な気持ちからだと思つていただいては困ります。一番心配してゐたあなたのお眼が、元の通り完全に見える、さうなつたことだけでも、泣きたいほどうれしいのです。お顔の疵がなんです。あなたの肉体が、若し、わたくしに取つて大切なものであるなら、それは、ただ、あなたのお心が、そこにあるといふ目印としてなのです。」

「お別れしてゐた五年間、二十の春から二十五の秋まで、わたくしは、あなたの御写真を一度も出して見ませんでした。今だから申します。それは、物を言はない影、心に触れられない姿が、どんなにつまらないものかといふことを知つてゐたからです。あなたは、やつぱり独逸にいらつしやる。伯林大学の研究室で、せっせと勉強していらつしやる。さう思つてゐるだけが、せめてもの慰めだつたのです。時たま下さる、あの電報の

やうなあのお端書、あれが、あなたのお声、あなたからの愛の言葉だったのです。あなたと云ふ方は、わたくしには、一つの神秘的な存在です。いつでも、何か考へておいでになる、あのお顔は、決して、女に親しみを感じさせる顔ではありません。ですから、わたくしは、あなたが、あなたのお書斎で、何かお仕事をなさる、その時を選んで、あなたの後姿を、いつも見に行くことにしてゐました。両手で頭をかくへて、本を読んでおいでになる、その頸筋から肩へ、肩から腰へ、その余念のない後姿の、そこから感じられる落ちついた息づかひ、お笑ひになつてはいやですわ、ただそれだけが、わたくしのものといふ気がしたのです、それと、あのお声、今もちつとも変らないあのお声、『美いちやん、お茶』つておつしやるあのお声……。あれもわたくしのものよ。」（だんだん声がうるんで来る）こゝだけ、「よ」で結んである。

眼鏡　実に感心な方ですね、その方は。然しどんなものですかね。そいつをそのまゝ受け取るのは、なるほど、虫がよすぎますね。聞いてゐても胸がつまる。それだけ、その手紙の一句一句には苦しい努力が匿されてゐる。あなたとしては、やつぱり、その方を自由にしてあげる義務がありますね。それでよく事情がわかりました。あなたは、生きてゐちやいけない。

繃帯 （その辺を歩きまはりながら） どうして、世の中の女は、もつと冷酷に出来てゐないんでせう。君の、此の娘さんにしても、僕の、此の許嫁にしても、あんまり温すぎる。僕たちを苦しめるのは、その温い心なのです。少くとも、その思ひ出なのです。

眼鏡 さうとばかりも云へません。随分冷たい心をもつた女もゐます。

繃帯 さういふ女は男を悩まさない。男がなやまされない。一度或る女の、温い心に触れたら、その女が、どんなに冷酷な態度を示さうと、男の心は、その女から離れきることが出来ない、それはつまり、女といふものが、優しすぎるんです。生れつき温い心の持主なんです。僕はつくづくさう思ひました。さうして、その女のうちでも、僕の許嫁は特別な女なんです。まあ、此の手紙をしまひまで読んで御覧なさい。

眼鏡 えゝ、もうわかつてます。

繃帯 わかつてるでせう。わからなければ嘘だ。何と書いてあります。「あなたが御自分の姿を、それほど醜いと思召すなら、わたくしも、自分が醜くなるやうに努めます。世間に対してならば、どんなことでもします。炭を顔に塗つて外へも出ます。しかし、わたくしは、女です。少しでも美しく、さう思つて大事にする見目かたちは、ただあなたへのささやかな心尽しなのです。わたくしが美しくないといふことは、あなたに才能

がないといふことほど、恐ろしいことなのです。二人にとつて恐ろしいことなのです。それ以外のことは、ただ心と心との問題です。わたくしの、空っぽな頭を、あなたは軽蔑もしずにゐて下さる。あなたのお顔や、お姿を、それが、わたしに敵意を示したものでさへなければ、何んで、美しいとか醜いとか申しませう。」どうです。こゝに至つて、僕はもう返す言葉がない。僕は、これでも不幸でせうか。僕は何を苦しんでゐるのだ。僕は、なぜ死ななければならぬんだ。

眼鏡　そこが、男の意地ですよ。与へるといふものを、受け取つてはならないことがある。あなたは、世間の男のやうに、エゴイストではない。エゴイストでありたくない。さういふ信念をもつてをられればこそ、かういふ決心ができたのです。しかし、実に偉大ですよ、そのへんは。

繃帯　だが、君のやうに、純な気持ちぢやない。そこが、僕自身も不満なんです。「堪忍して頂戴」……桃割の少女が、死に臨んで、若い恋人の胸もとに囁いたこの一句は、男一人の命には代へられない。君が——それは何時のことだか知らないが——今夜まで生きのびてゐたこと、そのことが既に不思議なくらゐるだ。幻を追ふものは山を見ず、谷を見ず……まして汽車くらゐなんだ。

眼鏡　そんなことはありませんよ。僕なんかこそ、云はば自由なんですからね。その幻なら幻を、絶えずかうして頭の中に描いてゐること、それがもう、一つの意義のある生き方なんですからね。僕達二人の間には、例の一件を除いては、何も暗い思ひ出というものはない。最後までの一と月は、その中でも楽しい、そして静かな、初恋の思ひ出に応はしい朝夕でした。ミルクをかけた苺を、あの、小さな心臓のやうな苺を、僕が、一つ一つ、匙であの唇にはさませてやりました。さうすると、例の、あの眼を細くして『サンキユー』といふんです。『サンキユー』あゝ、サンキユー、サンキユー、こればかりは、幾度聞いても聞き飽きません。あの苺一つで、口が一杯になるらしいんです。『サンキユー』が、時とすると『チャンピユー』と聞えたり、『シヤンチュー』と聞えたりするんです。それから、また、それを云ふ口つきです。あゝ、たまらない、たまらない。僕は、それが面白さに、どれだけ苺を食べさせたでせう。

繃帯　（独言のやうに）苺か……。

（長い沈黙）

眼鏡

さう、云はば僕は自由なんです。ただ自分の気持だけなんですからね。それが、あなたの場合だと、苟くも一人の女を、これから幸福にするか、不幸にするかの問題なんだから、まるで、決心のつけ方が違ひますよ。さう云ふ風なら、事は早い方がいいですね。

繃帯

やらうと思や、いつでもやれるさ。

（やや長い沈黙）

眼鏡

然し、やつぱり、話は聞いて見ないとわからんもんですね。

繃帯

処で、眼の方は、もういゝのかい。

眼鏡

さつき、泣いたもんですから、どつかへ行つちまひました。

（間）

繃帯

今夜は、偶然、君といふ人に会つて、いろいろ話をしたが、兎に角、死ぬといふ

ことは理窟ぢやいかんのだし、これから次の汽車を待つにしても、また後先の争ひが起るにきまつてゐるんだから、どうです。その辺で一杯やつて、何れそのうち、別々にやることにしようぢやないか。

眼鏡　別々にね。（間）なんなら、今夜は、あんたがおやりになつて、僕が見届け役になつてもいいな。

繃帯　見届け役か、そいつはいゝな。どうだい、君が先にやつちや。

（間。兩人笑ふ）

眼鏡　しかし、笑ひごとぢやない。

（長い沈黙。兩人、また笑ふ）

繃帯　こんなことをするのにや、見物はない方がいゝだらう、いくら御商売が御商売でも……。

眼鏡

つまらんことになるもんだなあ。

繃帯

かうなると命なんていふものは、誰のもんだかわからなくなるね。

眼鏡

人のものでないことは慥かだ。

繃帯

たしかですか、それが。（間）

眼鏡

まあ、もう少し考へさせて下さい。（間）一体、僕は、何にしに此処に来たんで

す。

繃帯

さあ、自分の命が人の命よりも大事だといふことを知りに来たんだね。

眼鏡

僕はどうしても自分の命が、そんなに大事なものだとは思へない。

繃帯

君にとつて、それよりもつとめと大事でない命が、もう一つ此処にあるわけな

んだ。

眼鏡

さうか知ら。しかし、僕は、あれほど決心してゐたんです。

（汽笛。つゞいて汽車の音が聞える）

繃帯

ぢや、その決心を断行し給へ。さ、僕がゐて邪魔なら、僕は帰るよ。それとも、

元氣をつけてあげようか。

（汽車の音、次第に近づく）

眼鏡

（しほしほと起ち上り）その写真を下さい（写真を受け取って、つくづく眺めながら）さうだ、こんな意気地のないことぢや駄目だ。（急に繃帯をした男の手を取り）さあ、あなたも一緒に来て下さい。一緒に死にませう。

繃帯

（引張られながら）さう云はずに、まあ君からやり給へ。僕は急ぐ必要はないんだ。いろいろ計画もあるしするから……。

眼鏡

（無理矢理に相手を引摺り上げようとして）なんです、今になつて、卑怯な。

繃帯

卑怯なのは君のことだ。（相手の手を振りはらつて、後ろへ廻り、腰に手をかけて土手の上に押し上げながら）愚図々々してないで、さつさと行き給へ。

眼鏡

（押し上げられようとするからだを手と足で突つ張り）それや無茶だ。そんな法はない。

繃帯

（かまはずに、どんどん押し上げる）

眼鏡

そ、そ、そんな馬鹿な……そこは痛いんだ、痛い、痛い、痛いつたら……。

（汽車の音、いよいよ近づく）

繃帯

（手を放し）さ、今だ。

眼鏡

（転がるやうに駈け降り）あんまり乱暴ぢやありませんか。

繃帯

（どつかと材木に腰を卸し）失敬、失敬。

（汽車が、土手の上を通過する）

眼鏡

（黙つて、うつむいたまま、これも材木の上に腰をかける）

（長い沈黙）

繃帯

もういゝだらう、君。（起ちあがり、促すやうに）さ、そろそろ引上げよう。

眼鏡 (機械的に起ち上り、ふらふらと歩き出す)

繃帯 (その後を追ふやうに、眼鏡をかけた男に寄り添ひ) 僕はかう見えて、センチメ

ンタルなことは嫌ひな男だ。(しんみり) しかし、なんですよ、今、君を死なせるくらゐなら、僕が先へ死にますよ。ほんとですよ。

—幕—

青空文庫情報

底本：「岸田國士全集1」岩波書店

1989（平成元）年11月8日発行

底本の親本：「昨今横浜異聞」四六書院

1931（昭和6）年2月10日発行

初出：「新小説 第三十卷第二号」

1925（大正14）年2月1日発行

入力：kompass

校正：門田裕志

2011年12月4日作成

2016年4月13日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

命を弄ぶ男ふたり（一幕）

岸田國士

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>